博　多　99

－博多遺跡群第140次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第808集

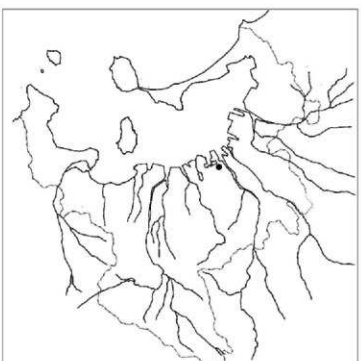
2004

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　99

－博多遺跡群第140次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第808集



遺跡略号　HKT－140
遺跡調査番号　0238

2004

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

現在、アジアにより一層開かれた活力のある国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る文化財の保護、活用に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、博多区上呉服町における共同住宅建設に先立って行われた博多遺跡群第140次調査を報告するものです。調査の結果、古代～中世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、株式会社リファレンスをはじめとする関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表するとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　生　田　征　生

例　言

1．本書は福岡市博多区上呉服町161-4地内における共同住宅建設工事に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成14年10月10日から平成14年12月18日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第140次調査の報告である。
2．検出した遺構については、集石遺構はＳＸ、溝はＳＤ、土坑はＳＫ、ピットはＳＰとし、ピット以外は一括して通し番号を付した。
3．本書に掲載した遺構の実測、写真撮影、製図は担当の井上繭子が行った。
4．本書に掲載した遺物の実測は谷直子が、拓影は山口とし子が、製図は谷、山口、井上が、写真撮影は井上が行った。
5．本書の執筆、編集は井上が行った。
6．本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理きれるので活用きれたい。

遺跡調査番号	0238		遺跡略号	HKT-140	
調査地地番	福岡市博多区上呉服町161-4地内				
開発面積	133.42㎡	対象面積	133.42㎡	調査面積	90㎡
調査期間	2002年10月10日～2002年12月18日			分布地図番号	千代博多48

目　次

本文目次

Ⅰ．はじめに
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査体制 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録
　1．調査経過 …… 4
　2．各調査区・遺構群の概要 …… 4
　3．調査区の土層 …… 7
　4．遺構と遺物 …… 11
　5．まとめ …… 29

挿図目次

第１図　周辺の遺跡（1/25,000） …… 2
第２図　調査地点の位置(1/1,000) …… 3
第３図　Ⅰ区第１～３面遺構平面図(1/50) …… 5
第４図　Ⅰ区第４面・Ⅱ区第１面遺構平面図(1/50) …… 6
第５図　Ⅰ区第５面・Ⅱ区第２面遺構平面図(1/50) …… 7
第６図　Ⅰ区第６・７面・Ⅱ区第３・４面遺構平面図(1/50) …… 8
第７図　Ⅰ区第８・９面・Ⅱ区第５・６面遺構平面図(1/50) …… 9
第８図　Ⅰ区第10・11面・Ⅱ区第７・８面遺構平面図(1/50) …… 10
第９図　Ⅰ区第12面・Ⅱ区第８面遺構平面図(1/50) …… 11
第10図　調査区土層図(1/80) …… 12
第11図　集石遺構実測図１(1/40) …… 13
第12図　集石遺構実測図２(1/40) …… 14
第13図　集石遺構出土遺物実測図(1/3、1/4) …… 15
第14図　SX75出土遺物実測図(1/3) …… 16
第15図　集石遺構・土坑実測図(1/20、1/30、1/40) …… 18
第16図　集石遺構・土坑出土遺物実測図(1/3) …… 20
第17図　井戸・溝・柱穴実測図(1/40、1/60) …… 21
第18図　井戸・溝・柱穴出土遺物実測図(1/3) …… 23
第19図　包含層出土遺物実測図１(1/3) …… 25
第20図　包含層出土遺物実測図２(1/3) …… 26
第21図　包含層出土遺物実測図３(1/3) …… 27
第22図　出土銅銭拓影(1/1) …… 28

表目次

表１　出土銅銭一覧表 …… 29

図版目次

図版１　１．Ⅰ区第１面全景（北東から）　２．Ⅰ区第２面全景（北東から）
　　３．Ⅰ区第３面全景（北東から）　４．Ⅱ区第１・２面全景（北東から）
　　５．Ⅰ区第４面全景（北東から）
図版２　１．Ⅰ区第５面全景（北東から）　２．Ⅱ区第３面全景（北東から）
　　３．Ⅰ区第６面全景（北東から）　４．Ⅱ区第４面全景（北東から）
　　５．Ⅰ区第７面全景（北東から）
図版３　１．Ⅱ区第５面全景（北東から）　２．Ⅰ区第８面全景（北東から）
　　３．Ⅱ区第６面全景（北東から）　４．Ⅰ区第９面全景（北東から）
　　５．Ⅱ区第７面全景（北東から）　６．Ⅰ区第10面全景（北東から）
図版４　１．Ⅱ区第８面全景（北東から）　２．Ⅰ区第11面全景（北東から）
　　３．Ⅱ区第９面全景（北東から）　４．Ⅰ区第12面全景（北東から）
　　５．Ⅱ区南東壁（西から）　６．Ⅰ区北西壁（南から）
図版５　１．SX14上面（北西から）２．SX14下面（北東から）３．SX24（北から）４．SX44（南から）
図版６　１．SX18上面（北西から）　２．SX18下面（南から）　３．SX54（南西から）
図版７　１．SX75第１面（北西から）　２．SX75第２面（北西から）
　　３．SX75第３面（北西から）　４．SX75第４面（北西から）
図版８　１．SK41（北西から）　２．SX83上面（南東から）　３．SX83下面（南東から）
図版９　１．SK34（南東から）２．SK61（東から）３．SK103（北西から）４．SK106（北西から）
図版10　１．SE65（北東から）２．SE68（南西から）３．調査をされた方々
図版11　出土遺物１
図版12　出土遺物２
図版13　出土遺物３（その他陶磁器類）

Ⅰ．は　じ　め　に

１．調査に至る経過

2002年７月16日付で株式会社リファレンスより、共同住宅の建設に先立ち、福岡市博多区上呉服町161番４地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は博多遺跡群内に位置していること、隣接した地点で第102・120次調査等が行われ、遺跡の存在が明らかなことから、工事が行われる範囲においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、株式会社リファレンスとの間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は2002年10月10日～2002年12月18日の間に行った。

２．調査体制

調査委託　株式会社リファレンス　代表取締役　相部光伸
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　生田征生
調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
　　調査第２係長　田中壽夫
調査庶務　文化財整備課　御手洗清
事前審査　田上勇一郎
発掘調査　井上繭子
調査作業　石川洋子　伊藤美伸　乾俊夫　桑原美津子　田中トミ子　鍋山治子　林厚子
　　播磨千恵子　平井武夫　吹春憲治　水野由美子
整理補助　谷直子（九州大学大学院）
整理作業　川田京子　佐々木涼子　馬場弓子　福島由衣子　山口とし子

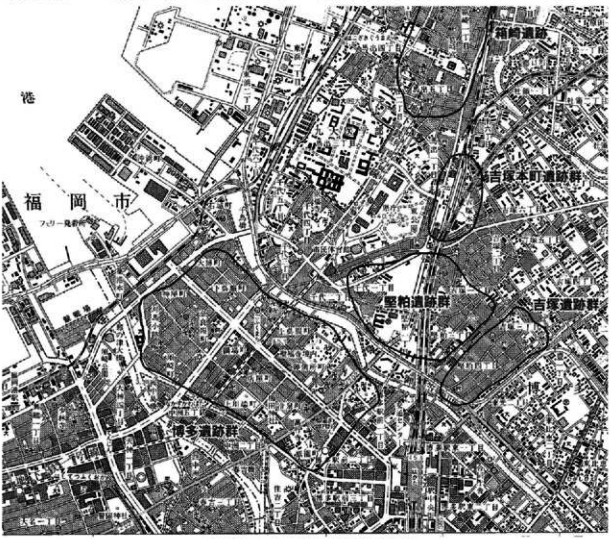
このほか、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について株式会社リファレンスをはじめとする関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

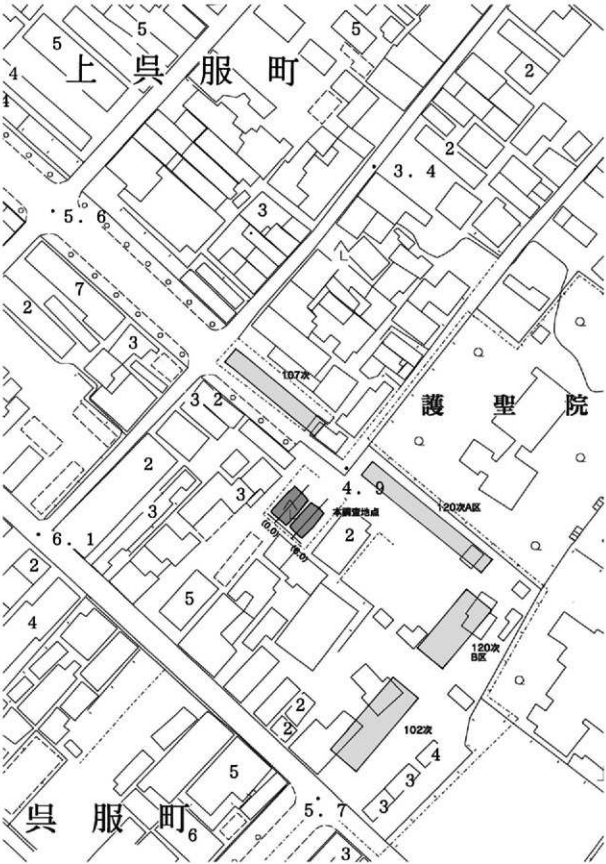
博多遺跡群は博多湾沿いに連なる古砂丘上で、那珂川右岸下流域に位置し、弥生時代～近世に至るまで集落が営まれていた複合遺跡である。その範囲は南北約1.5km、東西約0.8kmを測る。弥生時代中期頃から集落が営まれ、蒙古襲来以降は鎮西探題が設置され、大宰府に代わる九州の中心となる。その度に戦乱、復興を繰り返し、近世初め頃まで博多商人が活躍する国際貿易都市として繁栄していた。

本調査地点は博多区上呉服町に位置する。1997年と1999年に発掘調査が行われた第102次、第107次、第120次調査地点は本調査地点に近接し、特に第120次調査地点A区の南西側に位置する。本調査地点東側一帯には聖福寺の境内が位置し、その中の護聖院と瑞応庵に隣接する。護聖院は聖福寺の開山である栄西をまつる開山堂である。護聖院、瑞応庵ともに聖福寺の塔頭である。この両塔の間には近世まで継光庵が存在した。文化期福博古図にあわせると第102次調査地点は金屋小路町の町屋、第107次調査地点は普賢堂下の町屋、第120次調査地点は継光庵の寺域に含まれるとしている（「博多80」福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集　2002年）。

これから見ると、本調査地点は継光庵、普賢堂下の町屋の境目付近に位置することになる。いずれにしても、聖福寺古図によると聖福寺の築地塀に囲まれて地内町が描かれているが、本調査地点がこの地内町に含まれ、広義の意味での聖福寺寺域内に位置していたといえよう。



第１図　周辺の遺跡（1/25,000）



第２図　調査区の位置(1/1,000)

Ⅲ．調査の記録

１．調査経過

博多遺跡群第140次調査地点は、第102･120次調査地点の結果から、遺構面は数面存在し、さらに現地表面から３ｍ超える深さとなることが推定された。本来ならば安全面の上でも矢板工事を行い、土留めをした上での調査が必要であるが、種々の事情から土留め工事なしでの発掘調査をせざるを得なくなった。遺構面はほとんどが砂層であり、隣地からの引きや調査区内の法面は充分に余裕を持たせなければ調査区の壁が崩壊し、非常に危険であるため、完全な反転での調査は行えず申請地内に２ヶ所の調査区を設けるような方法での調査を行うことにした。

まず、申請地内の北西半分に上端での面積で約48㎡の調査区を設定し、これをⅠ区とした。本来ならば、調査区にトレンチを設け、その断面で層序を判定しながら層ごとに掘り下げていくのが望ましいのであるが、調査区が狭いためにトレンチを入れることができず、人工層位的に約20㎝ごとに掘り下げて面を広げていくという方法をとらざるを得なかった。このため、Ⅰ区で設定した遺構面は12面に及んだが、この面がすべて１時期の生活面であるとはいえない。Ⅰ区の第１面は現地表面から約１ｍ下げたところで検出したが、近世の遺構面である。最下面の第12面は、標高約３ｍの黄褐色砂層面である。安全上法面にかなりの傾斜を持たせたため、第12面の調査面積は約10㎡となった。

Ⅰ区の調査が終了した後、これを埋め戻し、調査区の上端で約１ｍ離し、Ⅱ区を設定した。上端での面積は約41㎡である。Ⅱ区は現地表面より約1.5ｍまで下げたところで第１面を設定し、第８面まで遺構面を検出した。土層の状況とレベルから、Ⅱ区の第１面はⅠ区の第４面に相当すると思われ、以下順次Ⅱ区の第８面とⅠ区の第12面まで遺構面を整合させている。Ⅱ区第８面の調査面積は約９㎡である。

いずれの調査区も第１面までは重機による掘削を行い、以下は人力で掘削を行った。そして、各区各遺構面ごとに遺構の検出･掘削･1/20の図面作成･写真撮影を順次行い、12月18日には撤収を行い、すべての作業を終了した。

２．各調査区・遺構面の概要

①Ⅰ区第１面

現地表面下約１ｍで検出した。標高約5.0ｍの茶褐色土層上面である。ピット、土坑が検出されたが、出土遺物から見て近世以降の生活面であろう。

②Ⅰ区第２面

標高約4.9ｍの暗褐色土層上面が遺構面である。ＳＸ14が検出されている。

③Ⅰ区第３面

標高約4.7ｍの暗灰褐色土層上面で検出した遺構面である。ＳＸ18、ＳＫ19が検出されている。

④Ⅰ区第４面・Ⅱ区第１面

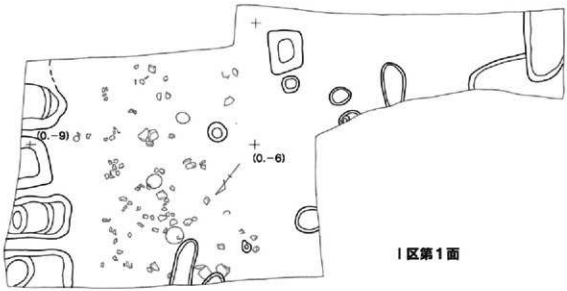
標高約4.6ｍ～4.7ｍの遺構面である。茶褐色土層上面である。ＳＸ24（Ⅰ区）、ＳＸ83（Ⅱ区）が検出されている。

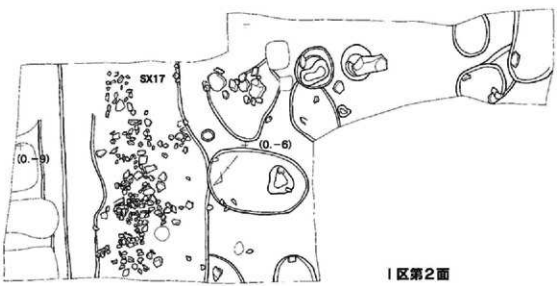
⑤Ⅰ区第５面・Ⅱ区第２面

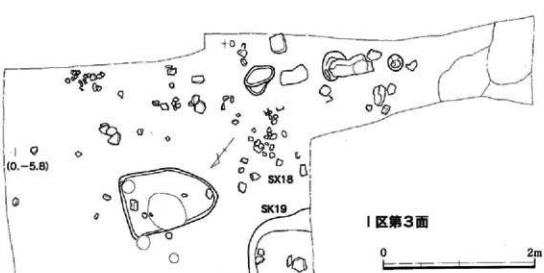
標高約4.5ｍで、Ⅰ区は暗茶褐色土層、Ⅱ区は灰褐色土層上面である。ＳＸ41、ＳＸ44（Ⅰ区）、ＳＸ75（Ⅱ区）、ＳＫ43、ＳＰ31、ＳＤ40、ＳＤ42（Ⅰ区）が検出されている。

⑥Ⅰ区第６面・Ⅱ区第３面

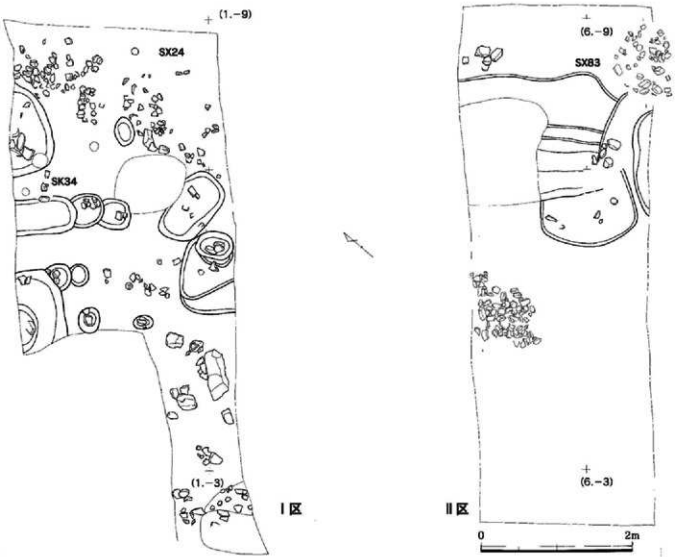
標高約4.2ｍ～4.3ｍで、Ⅰ区は黄褐色～灰褐色砂層、Ⅱ区は灰黄褐色土層上面である。ＳＸ54、ＳＫ51、建物になる可能性が高いＳＰ59、ＳＰ51（Ⅰ区）が検出されている。







第3図　Ⅰ区第1～3面遺構平面図(1/50)



第４図　Ⅰ区第４面・Ⅱ区第１面遺構平面図(1/50)

⑦Ⅰ区第７面・Ⅱ区第４面

標高約4.0m～4.1mで、Ⅰ区は黄褐色砂層、Ⅱ区は焼土混じりの灰茶褐色土層上面である。ＳＫ61、ＳＤ59（Ⅰ区）が検出されている。

⑧Ⅰ区第８面・Ⅱ区第５面

標高約3.7m～3.9mで、Ⅰ区は焼土がのる黄褐色土層、Ⅱ区は茶褐色～灰黄褐色砂層上面である。ＳＥ65、ＳＥ68、ＳＫ67（Ⅰ区）、ＳＥ101（Ⅱ区）が検出されている。

⑨Ⅰ区第９面・Ⅱ区第６面

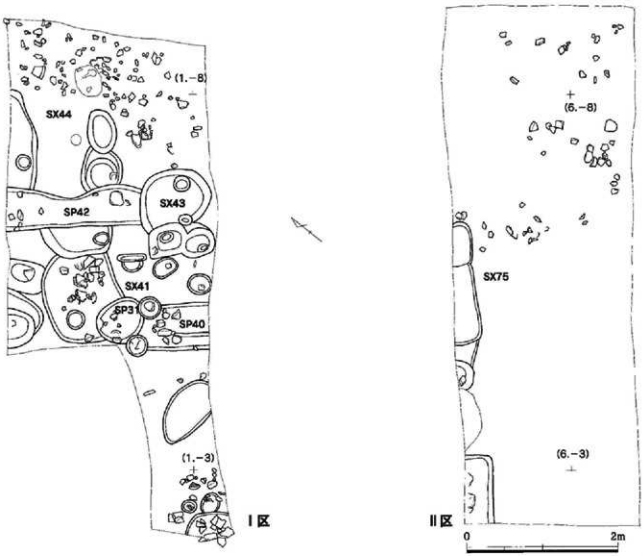
標高約3.6m～3.7mで、Ⅰ区は黄褐色土硬化面、Ⅱ区は灰黄褐色砂層上面である。ＳＫ103、ＳＫ106（Ⅱ区）が検出されている。

⑩Ⅰ区第10面・Ⅱ区第７面

標高約3.5mで、暗褐色砂層上面である。ピット、土坑が検出されている。

⑪Ⅰ区第11面・Ⅱ区第８面

標高約3.0m～3.3mで、Ⅰ区は茶褐色砂質土層、Ⅱ区は茶褐色～黄褐色砂層となる。建物になる可能性が高いＳＰ96、ＳＰ103（Ⅰ区）が検出されている。



第5図　Ⅰ区第5面・Ⅱ区第2面遺構平面図(1/50)

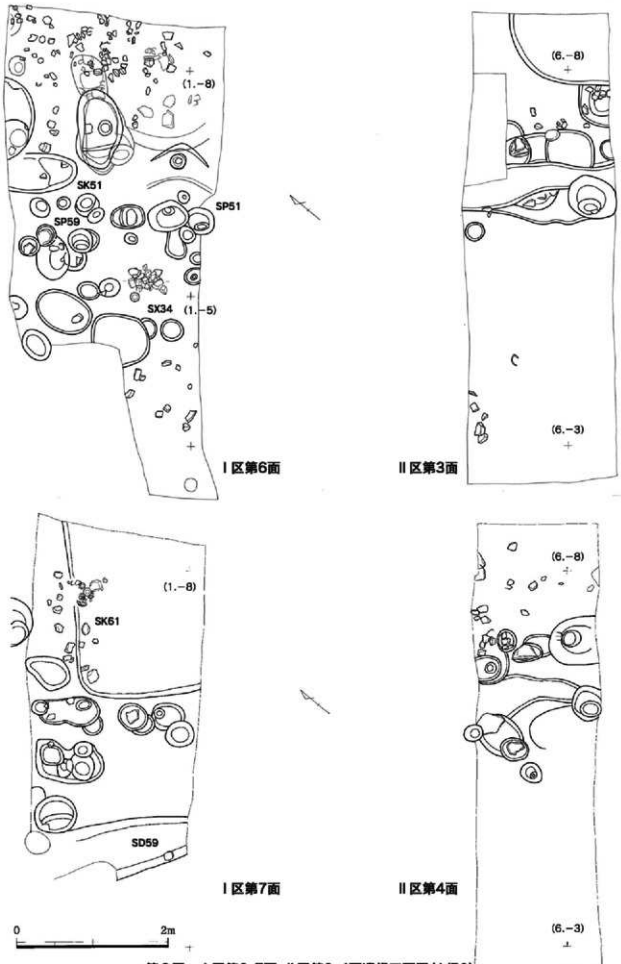
⑫Ⅰ区第12面・Ⅱ区第9面

標高約2.9m～3.2mを測る。最下面で、黄褐色砂質土層となる。ピット、土坑が検出されている。

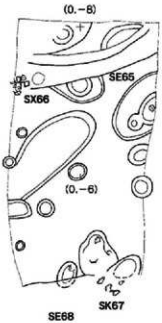
3．調査区の土層

先にも述べたように調査区が狭いため全体的な土層の広がりを押さえるのは困難であった。そのため、数十cm単位での人工的な層位での掘り下げしかできなかったため各面が1時期を示しているとはいえない。各調査区の壁の土層を示したのが、第10図である。土層により明らかになったのが、Ⅰ区の南西端における井戸と思われる掘り込みである。面として検出できたのが第8面であるが、実際の掘り込みは標高約5m前後である。土層で見ると、堀方の中央付近に井筒と思われる灰褐色砂層が見られるが、井筒そのものは検出できなかった。

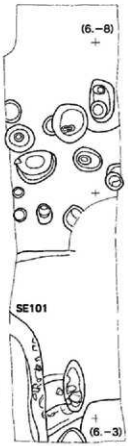
Ⅰ区の標高約3.8m付近で整地層と思われる互層が見られる。これは粘土を挟み硬化した面も検出された。この整地層はⅡ区の方では顕著には見られず、申請地北西部に偏っていると思われる。また、Ⅱ区の調査区南東側の壁において、上層からの掘り込みが見られるがこれも井戸である可能性が高い。平面的には検出できなかったが、Ⅱ区の南西側は井戸の中であり、



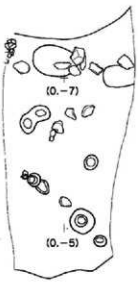
第6図　Ⅰ区第6・7面・Ⅱ区第3・4面遺構平面図(1/50)



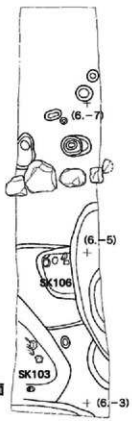
Ⅰ区第8面



Ⅱ区第5面



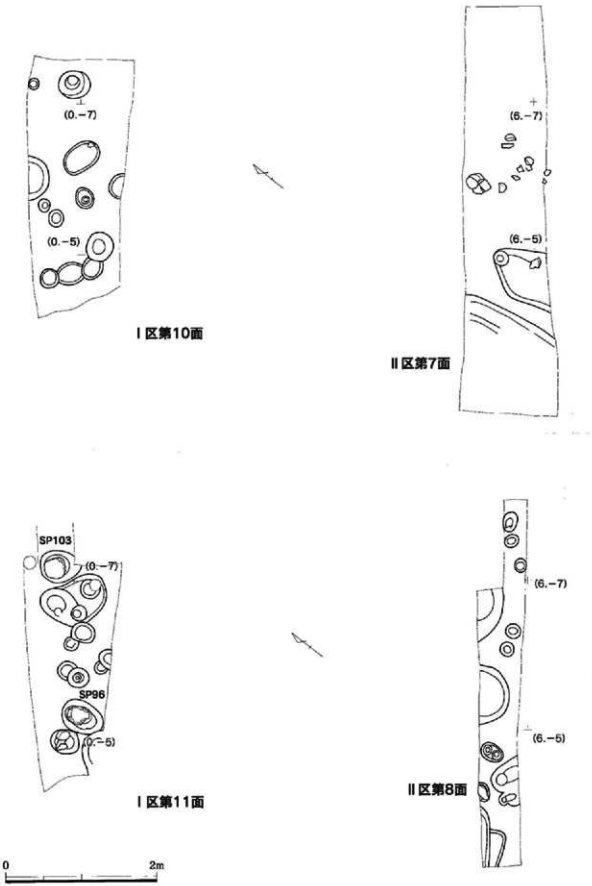
Ⅰ区第9面



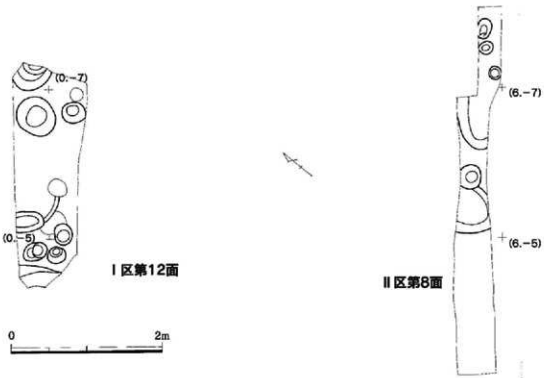
Ⅱ区第6面

0 2m

第7図　Ⅰ区第8・9面・Ⅱ区第5・6面遺構平面図(1/50)



第8図　Ⅰ区第10・11面・Ⅱ区第7・8面遺構平面図(1/50)



第９図　Ⅰ区第12面・Ⅱ区第8面遺構平面図(1/50)

ＳＸ75は井戸中の集石であろう。

4．遺構と遺物

遺構の種類ごとに説明を行う。

①集石遺構

ＳＸ14

Ⅰ区第２面北東端で検出された。北西－南東の方向で帯状に延びる。幅約1.3ｍを測る。

出土遺物　１は青磁碗である。高台径5.0cmを測り、灰白色の胎土にオリーブ色の釉がかけられる。高台内部はかき取られて露胎となる。見込みに花卉文が施される。２は白磁皿か。白色の胎土に透明釉がかけられる。外面下半から高台底部は露胎となる。見込みに花卉文のスタンプが施される。高台径は4.2cmを測る。３は須恵質の甕である。口縁部断面は嬰先状を呈する。口径15.6cmを測る。４は土師質の鍋である。暗褐色を呈する。

ＳＸ24

Ⅰ区第４面北東端で検出された。ほぼ南北方向に延びる。幅約1.2ｍを測る。

出土遺物　５は白磁碗でＥ群である。高台径は5.6cmを測る。器壁はかなり薄く、高台も高めである。白色の胎土に透明釉がかけられるが、外面は露胎となる。

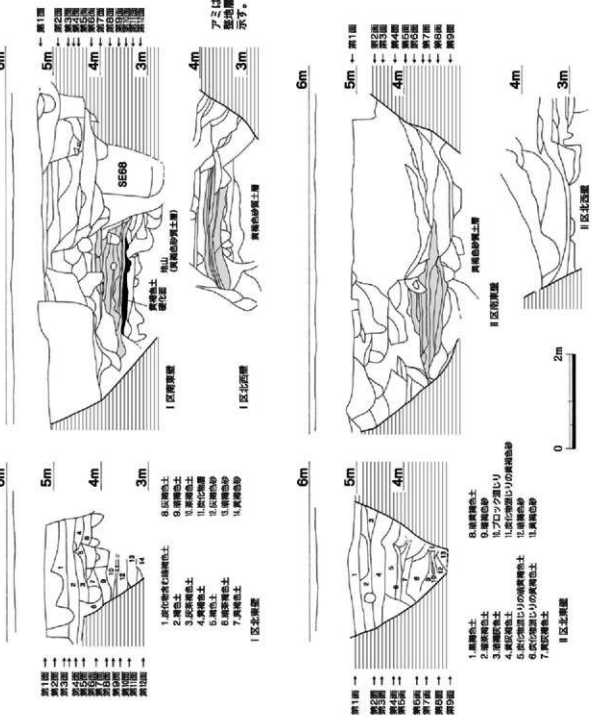
ＳＸ44

Ⅰ区第５面北東端で検出された。幅約１ｍの帯状に分布し、ほぼ南北方向に延びる。

出土遺物　６は備前のすり鉢である。Ⅴ期である。口径は31.0cmを測る。７は土師器の坏である。口径11.6cm、器高3.4cm、底径8.2cmを測る。糸切り離し底部である。

ＳＸ18

Ⅰ区第３面中央付近で検出した。長径154cm、短径90cmの平面楕円形の土坑である。石、土器片が集中している。



第10図　調査区土層図(1/80)

出土遺物　9は青磁碗か。高台径は5.4cmを測り、灰白色の胎土にオリーブ色の釉がかけられるが、高台畳付と高台内部は露胎となる。10は土師器の坏である。糸切り離し底部で、口径11.4cm、器高3.6cm、底径7.6cmを測る。

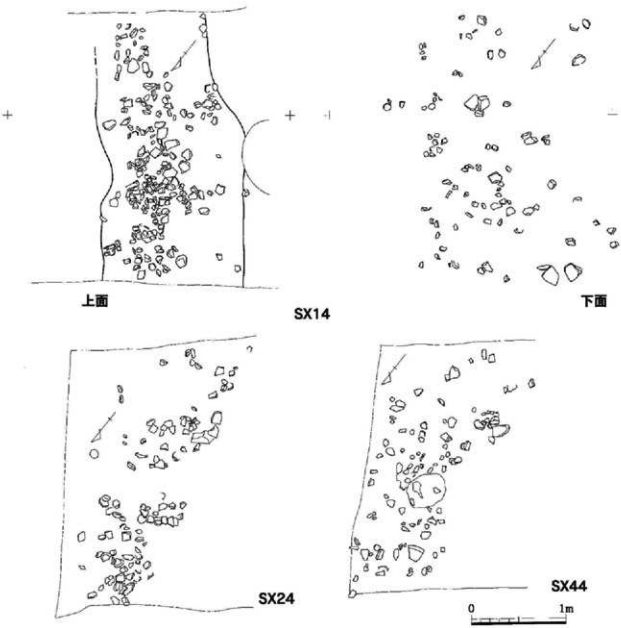
ＳＸ54

Ｉ区第６面中央付近で検出した。堀方は不明である。径約50cmの範囲に礫、土師器坏が集中している遺構である。

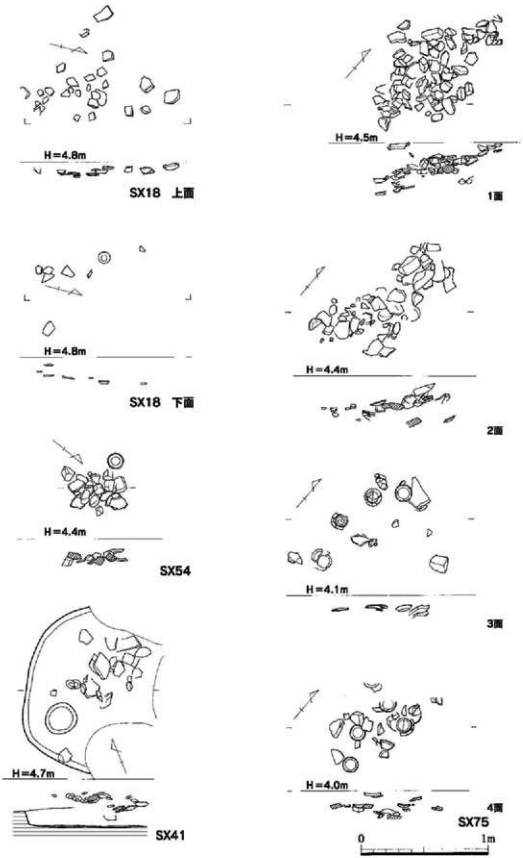
出土遺物　11は土師器の坏。糸切り離し底部で、口径12.3cm、器高2.4cm、底径8.6cmを測る。12は須恵器坏である。断面方形の高台が底部やや内側につく。高台径は8.1cmを測る。灰白色を呈する。

ＳＸ41

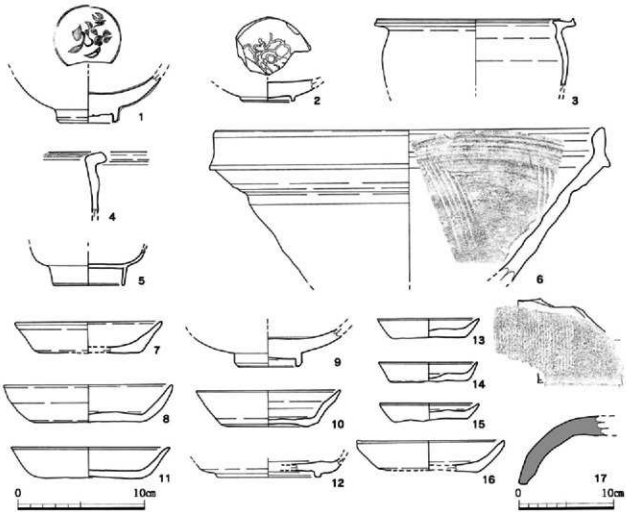
Ｉ区第５面中央付近に位置する。長径130cm、短径100cm以上の楕円形を呈し、深さ14cmの土坑で、礫や土師器の坏等が集中している。



第11図　集石遺構実測図1(1/40)



第12図　集石遺構実測図2(1/30)



第13図　集石遺構出土遺物実測図(1/3、1/4)

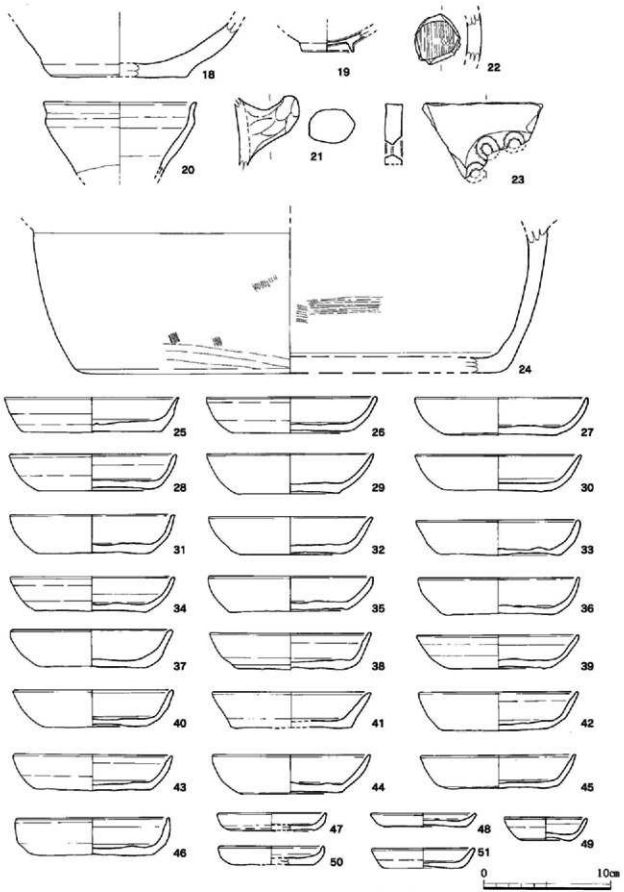
出土遺物　13～15は土師器の小皿である。いずれも糸切り離し底部で、各々口径は8.0cm、7.8cm、7.8cm、器高1.4cm、1.5cm、1.3cm、底径5.9cm、6.2cm、5.8cmを測る。16は土師器の坏である。糸切り離し底部で口径11.6cm、器高2.4cm、底径8.0cmを測る。17は丸瓦である。凸面に縄目が見られる。

ＳＸ75

Ⅱ区第１面～第５面で検出した。調査区北西壁付近に位置する。上部には礫が集中しており、礫を除去すると下面から多量の土師器坏が集中して検出された。特に重ねられているような規則性は見られない。土層断面から見て、井戸の堀方内である可能性があり、井戸に投棄されたものであろうか。

出土遺物　18は東播系こね鉢の底部である。底径10.6cmを測る。内外面ともにナデで調整される。19は青磁碗である。底径4.0cmを測り、灰白色の胎土に青灰色の釉がかかる。畳付のみ露胎となる。20は口径12.0cmを測る天目茶碗である。内外面に黒褐色釉がかかるが、外面下半は釉がかからず露胎となる。21は甑の把手。22は瓦質の円形土製品。23は瓦質甑の底部で、孔が３カ所見られる。24は瓦質の火舎である。内外面に一部ハケメのあとが残る。底径34.2cmを測る。

25～46は土師器の坏である。このうち26、27、31、33、35、37、40、42は糸切り離し底部に板圧痕が見られる。43、46は糸切り離しの後にハケメ痕が見られる。その他は糸切り離



第14図　SX75出土遺物実測図(1/3)

し底部である。口径12.1～13.8cm、器高2.6～3.2cm、底径8.2～11.0cmを測る。47～51は土師器の小皿である。口径6.6～8.6cm、器高1.0～1.8cm、底径4.4～7.0cmを測る。いずれも糸切り離し底部で、49は他に比べて器高が高い。

ＳＸ83

Ⅱ区第１面北東端付近に位置する。堀方は不明であるが、長径100cm、短径80cmの楕円形の範囲に石が集中している。下面には礫がコの字に近い形で並んでいた。

出土遺物　52は陶器の碗である。高台径5.6cmを測る。赤褐色の胎土に灰緑色の釉がかかる。高台内部は露胎となる。53は青磁碗の高台部分である。底径5.4cmを測り、灰白色の胎土にオリーブ色の釉がかかる。高台内部はケズリ込みが浅い。54は土師器の坏である。口径9.2cm、器高1.8cm、底径5.3cmを測る。糸切り離し底部である。55は砂岩製の不明石製品である。全面に調整面が見られる。幅6.4cm、現存長5.2cm、最大厚さ3.1cmを測る。

ＳＸ66

Ⅰ区第８面北端付近、ＳＥ65の上端付近に位置する。径30cmの円形状に礫が集中している。

②土坑

ＳＫ67

Ⅰ区第８面の南東付近、ＳＥ６８の堀方上端に位置する。長径50cm、短径30cmの楕円状の焼土中に土師器の坏等が入っていた。

出土遺物　56は土師器の坏で、口径12.2cm、器高2.6cm、底径8.6cm。糸切り離し底部である。

ＳＫ34

Ⅰ区第４面の北西壁付近に位置する。堀方は見られず、青磁碗と礫が検出された。

出土遺物　57は龍泉窯系青磁碗である。幅広の連弁の下部と見られる片切彫りの断片が見られ、見込みには輪花文のスタンプが施される。高台径は5.0cmを測り、灰褐色胎土に緑灰色の釉がかけられる。畳付から高台内部は露胎となる。

ＳＫ61

Ⅰ区第７面北東付近に位置する。土師器の坏、皿が集中していた。堀方は不明である。

出土遺物　58は土師質の鍋である。口縁部はゆるくく字状に屈曲して開く。口径37.0cmを測る。外面にすすが付着し、内外面ともにハケメで調整がなされる。59は土師器の坏である。口径12.6cm、器高2.8cm、底径8.8cmを測る。糸切り離し底部で板圧痕が見られる。60～63は土師器の小皿である。60、62、63は各々口径が7.7cm、7.6cm、7.6cm、器高1.4cm、1.3cm、1.3cm、底径5.3cm、5.1cm、5.8cmを測る。61の底径は5.8cmである。いずれも糸切り離し底部である。

ＳＫ103

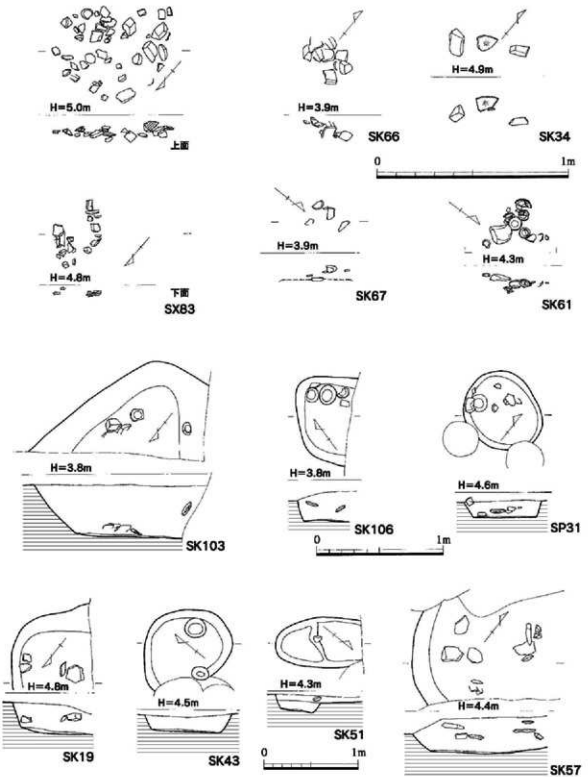
Ⅱ区第６面南西端に位置する。壁に切られているが、長径140cm以上の平面楕円形を呈し、深さ40cmを測る土坑である。

出土遺物　64～70は土師器の坏である。口径12.0～12.8cm、器高2.4～3.4cm、底径7.0～9.0cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。71～73は土師器の小皿である。口径7.6～8.4cm、器高1.0～1.4cm、底径5.8～7.4cmを測る。74は石鍋口縁部の把手部分である。滑石をケズリ出し、磨いて整形している。

ＳＫ106

Ⅱ区第６面南東壁付近に位置する。他の土坑に切られているが、70cm×40cm以上の平面方形を呈し、深さが10cmを測る土坑である。土師器の坏が出土している。

出土遺物　75～77は土師器の坏である。各々口径12.4cm、10.4cm、10.8cm、器高2.4cm、



第15図　集石遺構・土坑実測図(1/20、1/30、1/40)

3.0cm、2.7cm、底径8.4cm、8.4cm、7.0cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。

ＳＰ31

Ｉ区第５面の中央付近に位置する。長径64cm、短径56cm、深さ13cmを測る平面楕円形を呈する。土師器の坏、礫などが出土している。

出土遺物　78は土師器の坏である。口径12.2cm、器高2.4cm、底径7.8cm。糸切り離し底部を呈する。

ＳＫ19

Ｉ区第３面北西壁中央付近に切られる。80cm×80cm以上、深さ30cmの平面方形の土坑である。

出土遺物　79は土師器の坏である。口径12.4cm、器高3.0cm、底径9.8cmを測る。糸切り離し底部で、口縁部の立ち上がりが直線的な器形である。80は土師器の小皿である。口径8.8cm、器高1.8cm、底径6.6cmを測る。糸切り離し底部である。81は陶器の鉢である。灰褐色を呈し、底径9.0cmを測る。強い回転ナデで内外面ともに稜線が強く出ている。バケツ形を呈する。

ＳＫ43

Ｉ区第５面南東壁やや北東寄りに位置する。長径84cm、短径80cm、深さ20cmの平面楕円形を呈する土坑である。

出土遺物　82は口ハゲの白磁碗である。白色の胎土に透明釉がかかるが、口縁端のみ露胎となる。口径10.4cmを測る。

ＳＫ51

Ｉ区第６面北西壁やや北寄りで切られる。長径90cm、短径54cm、深さ６cm～16cmの平面楕円形を呈する土坑である。二段掘りを呈する。

出土遺物　84は青磁碗である。口径17.0cmで、灰褐色の釉がかかるが、外面の下半は露胎となる。

ＳＫ57

Ｉ区第５面の北東に位置し、長径170cm以上の平面楕円形を呈すると思われる。深さ40cmを測る。

出土遺物　83は土師器坏である。口径13.3cm、器高3.1cm、底径9.0で、糸切り離し底部を呈する。

③井戸

調査区が狭いため井戸の全容を検出することは不可能であった。

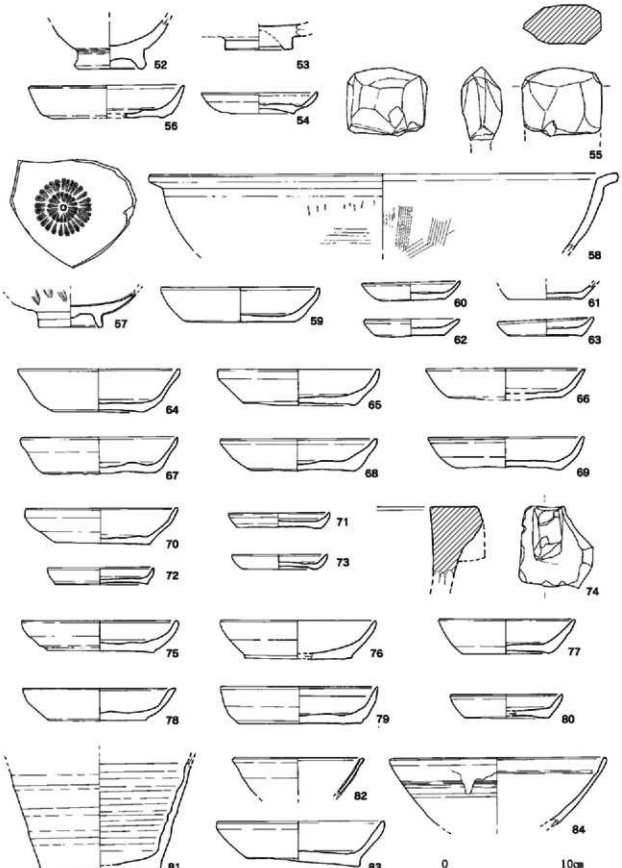
ＳＥ65

Ｉ区第８面で検出した。調査区北東壁に切られる。底面まで掘削することはできなかった。

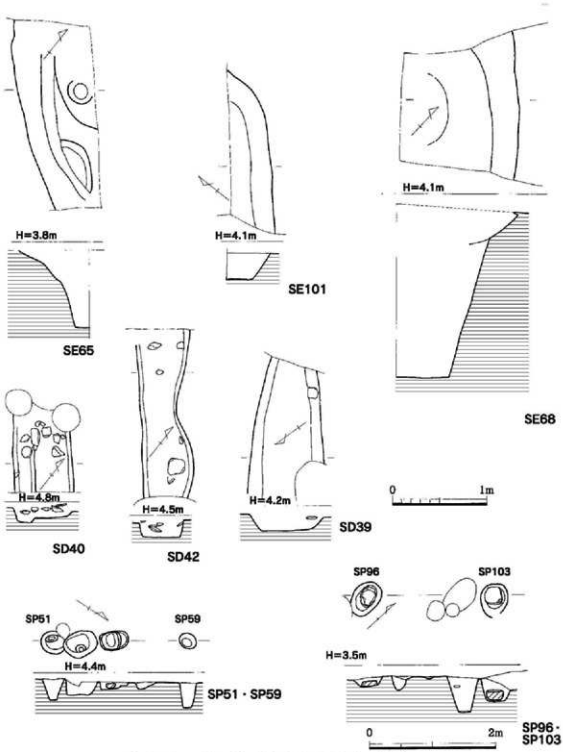
出土遺物　85～87は土師器の坏である。各々口径12.6cm、12.4cm、11.4cm、器高2.7cm、3.2cm、2.6cm、底径8.2cm、7.2cm、8.2cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。88、89は土師器の小皿である。各々口径7.4cm、8.1cm、器高2.0cm、1.2cm、底径4.0cm、6.0cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。90は土師器の坏の底部である。破片のため法量は不明であるが、底部外面に墨書が見られる。91は黒色土器の底部である。断面ハ字形に高台がつき、高台径は6.6cmを測る。内面は黒色を呈し、底部付近に穿孔が見られる。92は青磁の皿か。高台径11.0cmを測る。灰褐色胎土に青灰色の釉がかかる。畳付は露胎となる。93は青磁碗である。高台径5.4cmを測り、灰褐色の胎土に灰緑色の釉がかかる。高台内部は露胎となる。

ＳＥ101

Ⅱ区第５面北西壁の南寄りで切られている。上面から掘り込まれていた井戸の底部付近であ



第16図　集石遺構・土坑出土遺物実測図(1/3)



第17図　井戸・溝・柱穴実測図(1/40、1/60)

る可能性がある。

出土遺物　94～96は土師器の小皿である。各々口径8.4cm、7.8cm、7.0cm、器高1.8cm、1.6cm、1.8cm、底径6.0cm、6.2cm、5.4cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。

ＳＥ68

Ｉ区第８面で検出したが、壁の土層から、さらに上面から掘り込まれていたと考えられる。南西壁に切られ、全面的に掘削することはできなかった。

出土遺物　97は土師器小皿で、口径8.9cm、器高1.3cm、底径6.8cm。糸切り離し底部である。

④溝

ＳＤ40

Ｉ区第５面の南東壁中央付近で切られる。幅約62cm、深さ８～13cm、北西－南東の方向で延びる。

出土遺物　98は土師器の坏である。口径10.8cm、器高3.0cm、底径6.7cmを測る。

ＳＤ42

Ｉ区第５面北西壁に切られる。幅約40～54cm、深さ18cmで、北西－南東の方向で延びる。ＳＫ４３に切られる。

出土遺物　99は青磁碗の底部である。高台径は6.6cmを測る。灰褐色の胎土に緑灰色の釉がかかるが、畳付は露胎となる。見込みに目跡が残る。

ＳＤ59

Ｉ区第７面南西付近に位置する。北西－南東の方向で延びる。

出土遺物　100は青磁碗の底部である。厚めの高台で高台径6.8cmを測る。灰褐色の胎土に灰青色の釉がかかるが、高台外面から内部にかけて露胎となる。

⑤柱穴

ＳＰ51・ＳＰ59

Ｉ区第６面調査区中央付近に位置し、北西－南東の方向をとる。複数のピットが並ぶため、建物の可能性があるが、対応する柱穴が検出不可能であった。

ＳＰ96・ＳＰ103

Ｉ区第11面で南西－北東の方向をとる。建物の可能性がある。

ＳＰ41　101は青磁碗もしくは皿である。高台径は7.0cmを測る。灰白色の胎土にオリーブ色の釉がかけられるが、高台内部は輪状にかき取られる。見込みには花文、唐草文様が施される。

ＳＰ83　102は龍泉窯系の青磁碗である。高台径6.0cmを測る。外面に片切り彫りの連弁文の断片が見られ、見込みには花文のスタンプが施される。灰白色の胎土に緑灰色釉がかけられる。

ＳＰ89　103は同安窯系の青磁碗である。見込みに櫛描文が施され、高台内部には墨書が見られる。墨書の文字は不明である。高台径は6.3cmを測る。

ＳＰ66　104は龍泉窯系の青磁碗である。鎬連弁文が施される。灰白色の胎土にオリーブ色の釉が全面にかけられる。口径17.0cmを測る。13世紀後半頃か。105は土師器の坏である。口径13.4cm、器高2.9cm、底径8.4cmを測る。糸切り離し底部である。

ＳＰ61　106は土師器小皿で、口径7.2cm、器高1.2cm、底径5.4cm。糸切り離し底部である。

ＳＰ63　107は土師器小皿で、口径7.6cm、器高1.2cm、底径5.8cm。糸切り離し底部である。

ＳＰ74　108は土師器小皿で、口径8.2cm、器高1.6cm、底径5.8cm。糸切り離し底部である。

ＳＰ89　110は土師器甕の口縁部である。口径12.6cmを測る。

ＳＰ119　109は土師器の坏である。口径11.6cm、器高3.0cm、底径7.8cmを測る。糸切り離し底部で、口縁部はやや外反する。

ＳＰ130　111は土師器小皿で、口径7.4cm、器高2.0cm、底径5.2cm。糸切り離し底部である。

⑥包含層・攪乱出土遺物

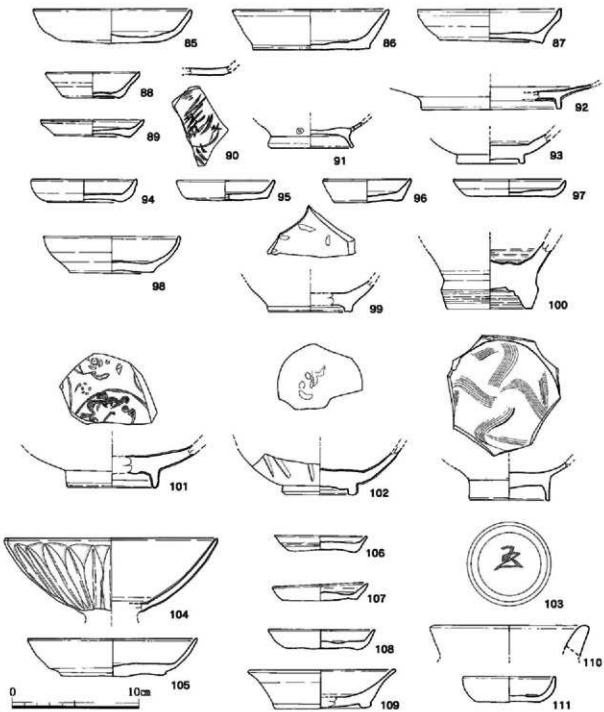
遺構から出土した遺物の他に、各層の包含層中・攪乱から出土した遺物について説明を行う。

Ｉ区第１面包含層

112、113は陶器碗である。112は高台径4.7cmを測り、見込みには3カ所砂目跡が残る。灰褐色胎土に灰緑色釉がかかる。113は高台径4.0cmを測り、灰褐色の胎土に灰緑色釉がかかる。

Ⅰ区第4面・Ⅱ区第1面包含層

114は青磁碗である。高台径5.8cmを測り、高台内部のケズリ出しは浅い。灰褐色胎土に灰褐色の釉がかかるが高台畳付と内部は露胎となる。115は土師器の坏である。口径13.4cm、器高3.0cm、底径10.0cmを測る。糸切り離し底部である。116、120は瓦質土器の火舎である。116は口縁部に印花文のスタンプが施され、内部はハケメで調整される。口径39.0cmを測る。



第18図　井戸・溝・柱穴出土遺物実測図(1/3)

117は瓦質土器で方形の容器状を呈する。外面はヘラミガキされ、スタンプ文が施される。内面はハケメで調整される。

Ⅰ区第５面・Ⅱ区第２面包含層

118は土師器の坏である。口径12.5cm、器高2.4cm、底径9.1cmを測る。糸切り離し底部である。119は土師器の小皿である。口径8.4cm、器高1.4cm、底径6.0cmを測る。121は磁器の小壺の底部であろう。底径2.2cmで、器壁は薄く、糸切り離し底部である。122は青磁碗の底部である。底径6.8cmを測り、灰白色の胎土に青灰色の釉がかかり、見込みは輪状にかき取られる。123は碁笥底を呈する青磁の皿であろう。白灰色の胎土に淡オリーブ色の釉がかかる。高台内部は露胎となる。底径6.6cmを測る。124は瓦質のこね鉢である。口径18.0cmを測り、内面にはハケメ調整がされる。125は青磁碗である。底径6.6cmを測り、灰白色の胎土に灰青色の釉が全面にかかる。126は白磁碗の底部である。底径は4.4cmを測り、高台内部に墨書が見られる。白色胎土に透明釉がかかるが、高台畳付から内部は露胎となる。127は瓦質火舎の底部である。内面にはハケメ調整がなされる。128は天目茶碗である。灰色の胎土に黒色の釉がかかるが、外面下半から底部にかけては露胎となる。底径4.7cmを測る。

Ⅰ区第６面・Ⅱ区第３面包含層

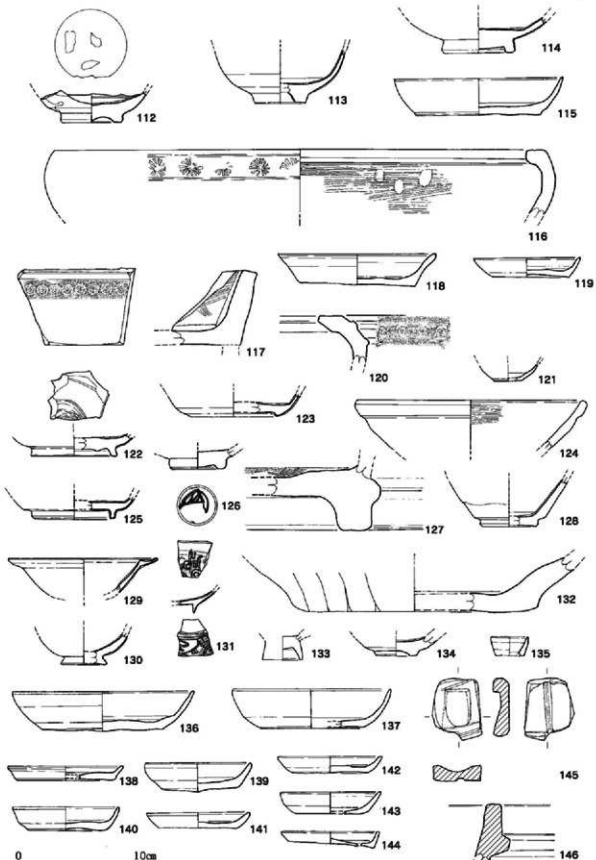
129は青磁の小鉢である。灰白色の胎土に淡緑色の釉が全体にかかる。口径11.8cmを測る。130は青磁碗の底部である。高台は底部が平坦な形態である。底径は3.6cmを測り、灰白色の胎土にオリーブ色の釉がかかるが、高台底部は露胎となる。131は明の青花皿である。内外面に唐草文様の図柄が描かれる。132は陶器鉢の底部。底径は19.6cmを測る。133は磁器の小型碗の高台であろう。高台径は3.2cmを測る。黄白色の胎土に淡灰緑色釉がかかる。134は天目茶碗の底部か。高台径は3.2cmを測り、灰色の胎土に黒色の釉がかかるが、高台畳付から内部は露胎となる。135は土師器の小型碗である。口径3.0cm、器高1.5cm、底径2.4cmを測る。136、137は土師器の坏で、各々口径14.4cm、12.4cm、器高3.2cm、3.2cm、底径9.6cm、8.0cmを測る。136は板圧痕が見られ、137は糸切り離し底部である。138～144は土師器の小皿で、口径7.8～9.2cm、器高1.0～2.4cm、底径5.2～7.2cmを測る。いずれも糸切り離し底部で、144は底部に穿孔が見られる。145は滑石製の不明石製品である。平面が約５cm×４cmの長方形を呈し、厚さは、1.2cmを測る。片面はくりぬかれ、反対の面には溝が刻まれている。146は滑石製石鍋の口縁部である。

Ⅰ区第７面・Ⅱ区第４面包含層

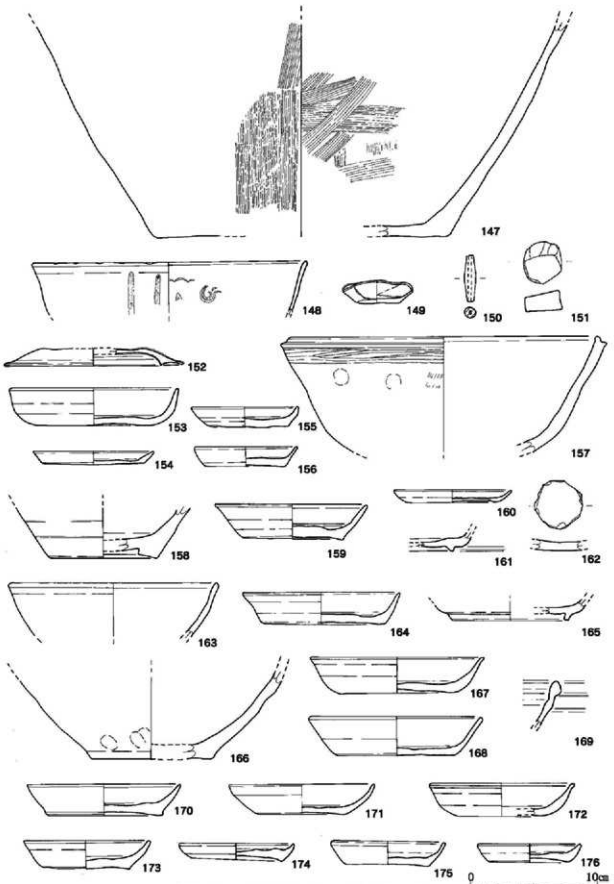
147は陶器の甕底部である。底径23.4cmを測る。内外面にハケメが施される。148は青磁碗である。口径21.8cmを測り、口縁端部には波状に切り込みが入る。外面には連弁文を意識した凹線が施される。内面には唐草文の崩れた図柄が施される。灰白色の胎土にオリーブ色の釉がかけられる。149は土師器の小皿であるが焼成前に押しつぶされた形状をなす。底径は3.4cmを測る。150は土錘である。長さ3.7cmを測る。151は円形土製品である。径3.4cm、厚さ1.3cmを測る。152は青磁の蓋であろうか。口径10.6cmを測る。灰褐色の胎土にオリーブ色の釉がかかるが、口縁端部は露胎となる。153は土師器の坏である。口径13.4cm、器高3.0cm、底径9.0cmを測る。糸切り離し底部に板圧痕が見られる。154～156は土師器の小皿である。各々口径9.6cm、8.5cm、8.2cm、器高1.1cm、1.6cm、1.6cm、底径8.2cm、6.4cm、6.4cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。157は須恵質の鍋か。口径25.8cmを測る。外面口縁部付近にはハケメが施される。

Ⅰ区第８面・Ⅱ区第５面包含層

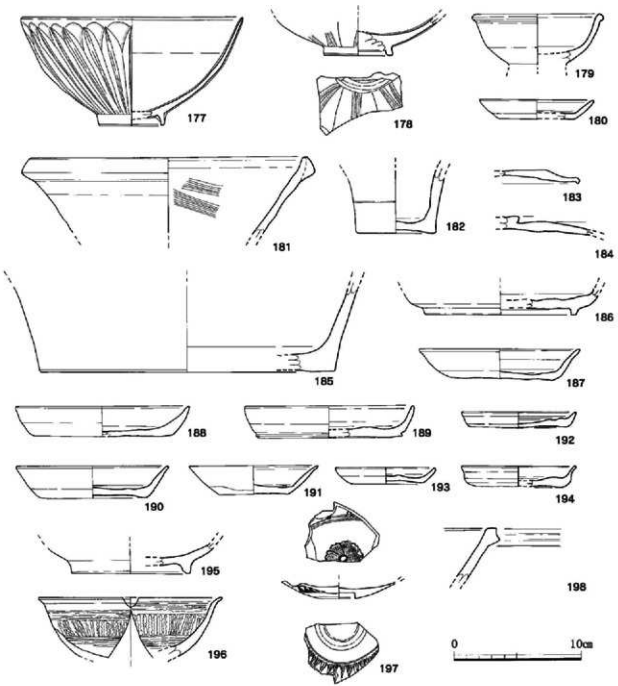
158は陶器鉢である。底径8.8cmを測り、灰白色の胎土に灰緑色の釉がかかる。159は土師器坏で、口径11.8cm、器高2.8cm、底径8.0cmを測る。糸切り離し底部に板圧痕が見られる。



第19図　包含層出土遺物実測図1(1/3)



第20図　包含層出土遺物実測図2(1/3)



第21図　包含層出土遺物実測図3(1/3)

160は土師器皿で、口径9.4cm、器高1.0cm、底径7.0cmを測る。底部はヘラ切りである。161は須恵器坏の底部である。断面台形の高台が底部やや内側につく。162は円形土製品である。径4.0cm、厚さ0.6cmを測る。

Ⅰ区第9面・Ⅱ区第6面包含層

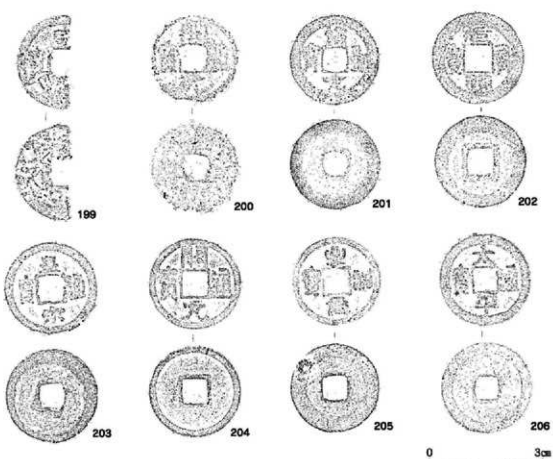
163は黒色土器の碗である。口径16.6cmを測る。内外面はヘラミガキが施される。164は土師器の坏である。口径12.4cm、器高2.5cm、底径9.8cmを測る。糸切り離し底部である。165は須恵器坏の底部である。断面方形の高台がつく。高台径11.2cmを測る。

166は東播系のこね鉢である。底径9.6cmを測る。167、168、170～173は土師器の坏であ

る。口径10.0～13.8cm、器高2.2～3.0cm、底径7.0～9.4cmを測る。159、171は糸切り離し底部に板圧痕が見られる。174～176は土師器の小皿である。各々口径9.2cm、9.0cm、8.0cm、器高1.3cm、1.8cm、1.4cm、底径7.2cm、6.6cm、6.4cmを測る。いずれも糸切り離し底部で、174には板圧痕が見られる。169は瓦質の鉢の口縁部であろうか。

Ⅰ区第10面・Ⅱ区第7面包含層

177は龍泉窯系青磁碗である。鎬連弁文が施される。口径17.4cm、器高8.6cm、底径5.2cmを測る。白灰色の胎土にオリーブ色の釉が厚くかかるが、畳付は露胎となる。13世紀後半であろう。178も龍泉窯系の碗である。外面には片切彫りによる連弁文が施されている。高台径は5.6cmで、灰白色の胎土に淡オリーブ色の釉がかかるが、高台内部は露胎となる。179は白磁碗である。口径10.4cmを測る。白色の胎土に透明釉がかかる。180は口ハゲの青磁皿である。口径9.0cm、器高1.6cm、底径6.0cmを測る。灰白色の胎土に灰褐色の釉がかかるが、口縁端部は露胎となる。181は東播系のこね鉢である。口径22.0cmを測る。内面にはハケメ調整がなされる。182は須恵質の甕の底部でコップ形を呈する。外面には自然釉がかかる。底径6.4cmを測る。183、184は須恵器の蓋である。つまみが付くタイプである。186は須恵器の坏で、高台がつくタイプである。底径12.0cmを測る。いずれも8世紀頃であろう。185は陶器甕の底部である。底径23.4cmを測る。187～191は土師器の坏である。口径10.2～12.7cm、器高2.3～



第22図　出土銅銭拓影(1/1)

2.6cm、底径5.8～11.6cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。192～194は土師器の小皿である。各々口径9.0cm、7.9cm、9.0cm、器高1.2cm、1.3cm、1.6cm、底径7.8cm、5.8cm、7.0cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。

Ⅰ区第11面包含層

195は黒色土器の碗である。底径9.4cmを測る。

攪乱出土遺物

196は朝鮮王朝陶器の粉青沙器坏である。内外面に白化粧土によるハケメを施す。口径14.4cmを測る。197は碁笥底の青花皿C－1類である。外面には波涛文帯と蕉葉文、内底見込みにはねじ花を描く。底径2.6cmを測る。198は滑石製石鍋の口縁部である。

⑦出土銅銭

以下に出土した銅銭の拓本と一覧表を示す。

遺物番号	出土遺構・層位	銭貨名	初鋳年	銭径(mm)
199	Ⅰ区第４面	咸平元寶？	北宋998	2.5
200	Ⅰ区第６面	開元通寶	唐618～907	2.3
201	Ⅰ区第６面	紹聖元寶	北宋1094	2.3
202	Ⅰ区第７面	元祐通寶	北宋1086	2.4
203	Ⅱ区第２面	皇永通寶	北宋1079	2.4
204	Ⅱ区第２面	開元通寶	唐618～907	2.4
205	Ⅱ区第７面	至和元寶	北宋1054	2.3
206	Ⅱ区ＳＫ97	太平通寶	北宋976	2.4

表1. 出土銅銭一覧表

５．まとめ

本調査地点では、８世紀後半頃から16世紀に至る時期の遺物が出土し、当概期に生活が営まれていたと考えられる。しかし、先にも述べたように、非常に制約のある調査であったため、面的に遺構の広がりを確認するのは困難であった。

本調査地点を立地的に見てみると、標高約3.2mで黄褐色砂層となり、これが砂丘の上面となる。この上面４m付近までに整地層が見られる。隣接している第107次・第120次調査地点Ａ区と比べてみると、第107次調査地点では、標高約３mぐらいで砂丘上面となるが、整地層は存在していない。また、黄色硬化面が認められているが、本調査地点Ⅰ区第８面で同様の硬化面が検出されている。一方第120次調査地点Ａ区では、北西側では標高３m付近で基盤である砂丘上面となるが、南東方向では急激に落ち、汚染された砂の堆積となる。本調査地点は全面的に基盤は砂丘上面となる。

さて、遺構の内容を見てみると、本調査地点では、墓や寺院に関連するような特殊な遺構は検出されていない。強いていえば集石遺構が多かったのと、Ⅱ区第６面で人頭大の石が並べられた状態で検出されたことである。整地層はあったが第120次調査地点ほど顕著ではなく、瓦等はほとんど出土していない。第107次・第120次調査の報告で、両調査地点の間に通っていた道路を境に、第120次調査地点は寺院敷地内であり、第107次調査地点は町屋であった可能性を指摘している。両地点の狭間に位置する本調査地点では、寺院敷地内に近い位置にあるもののそうと断定はできない。しかしいずれにせよ寺内町に位置する場所としての性格は示していると考えられる。

参考文献　大庭康時「博多80」福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集　2002
森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2　1982
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№2　1982
小野正敏「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№2　1982

図版1

1. Ⅰ区第1面全景(北東から)

2. Ⅰ区第2面全景(北東から)

3. Ⅰ区第3面全景(北東から)

4. Ⅰ区第1・2面全景(北東から)

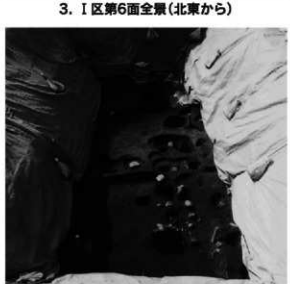
5. Ⅰ区第4面全景(北東から)

1. Ⅰ区第5面全景(北東から)

2. Ⅱ区第3面全景(北東から)

3. Ⅰ区第6面全景(北東から)

4. Ⅱ区第4面全景(北東から)



5. Ⅰ区第7面全景 (北東から)

図版3

1. Ⅱ区第5面全景(北東から)

2. Ⅰ区第8面全景(北東から)

3. Ⅱ区第6面全景(北東から)

4. Ⅰ区第9面全景(北東から)

5. Ⅱ区第7面全景(北東から)

6. Ⅰ区第10面全景(北東から)

1. Ⅱ区第8面全景(北東から)

2. Ⅰ区第11面全景(北東から)

3. Ⅱ区第9面全景(北東から)

4. Ⅰ区第12面全景(北東から)

5. Ⅱ区南東壁(西から)

6. Ⅰ区北西壁(南から)

図版5

1. SX14上面(北西から)

2. SX14下面(北東から)

3. SX24(北から)

4. SX44(南から)

1. SX18上面(北西から)

2. SX18下面(南から)

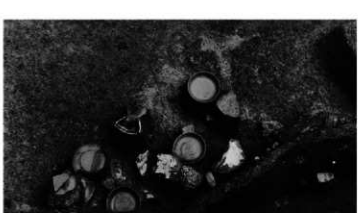
3. SX54(南西から)

図版7

1. SX75第1面(北西から)

2. SX75第2面(北西から)

3. SX75第3面(北西から)



4. SX75第4面(北西から)

1. SX41（北西から）

2. SX83上面（南東から）

3. SX83下面（南東から）

図版9

1. SK34(南東から)

2. SK61(東から)

3. SK103(北西から)

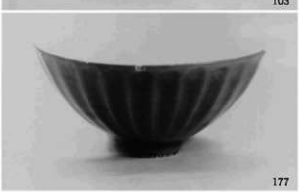
4. SK106(北西から)

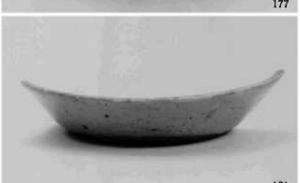
1. SE65(北東から)

2. SE68(南西から)

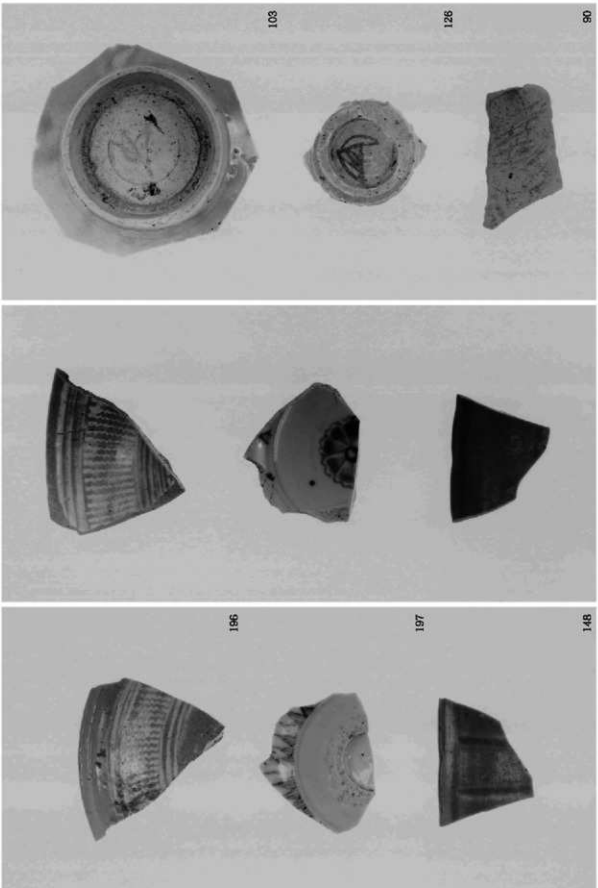
3. 調査をされた方々

図版11



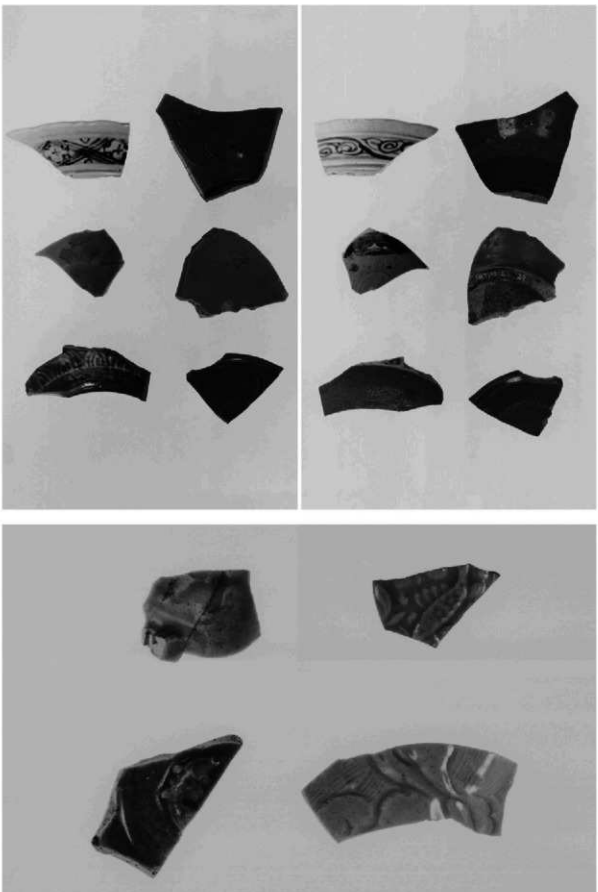


出土遺物　1



出土遺物　2

図版13



出土遺物　3（その他陶磁器類）

報告書抄録

書名	博多99
副書名	博多遺跡群第140次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	808
編著者名	井上　繭子
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20040331
郵便番号	810-8621
電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな	はかたいせきぐん
遺跡名	博多遺跡群第140次
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくかみごふくまち161-4ちない
遺跡所在地	福岡市博多区上呉服町161-4地内
市町村コード	40132
遺跡番号	020121
北緯	33°35′39″
東経	130°24′54″
調査期間	20021010－20021218
調査面積	90
調査原因	共同住宅建設
種別	集落
主な時代	中世
遺跡概要	聖福寺の寺内町としての性格を示す。
特記事項	
備考	

福岡市埋蔵文化財調査報告書第808集

博多99

－博多遺跡群第140次調査報告－

2004年(平成16年)3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印刷　川辺印刷有限会社
福岡市南区高宮1丁目7－19